
私のなすべきこと

睡華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のなすべきこと

【Nコード】

N3865Y

【作者名】

睡華

【あらすじ】

気がついたら、私は私ではなくなっていた。

身体も、つながりも…。私を私たら占めているものはこの思考だけ。

この身体の女性、その出来すぎた美しい夫、そして宿っていた命。

私はこれからどうすればいいの…？

ここは何処…？（前書き）

読んでいただきありがとうございます。皆様に少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

ここは何処…？

気がついたら、何処かの境内にいた。

白い玉砂利が敷かれ、日もよく入り玉砂利が反射して輝くよく手入れされたそれなりに大きそうな神社だった。

見える建物は朱色、茶色と神社建築独特の様式をしておりますんなり自分が神社にいることが認識できた。

しかし、なぜ私は此処にいるんだろう…？

前後の記憶が全くなく此処が何処の神社か今までの記憶からかすりもしない。

周りに知人もいなく、どうやら一人らしい。

はて…？

ふと自分の手を見ればまさに白魚の手と呼ぶにふさわしい手が視界に入ってきた。

その手は自分の意思どおりに手を握ったり開いたりしている。

おかしい…

私の手はこんなに綺麗ではない。

私の手は中学時代のソフトボール部の影響で節が太く、豆がいまだに残り母とそっくりな子供爪をしていた。

「私が飛行機事故で遺体確認が必要になったとき、この手でお母さ

んは私と判断できるね。」

と笑い話にしたものだ。

その手がない。

この手は私の手ではない！！

この目の前で動く手はなんなんだ！！

私は背筋に氷水を流されたようにぞつとし、鏡を探し始めた。

そうだ。

きっと毎日の手入れが身を結び人も羨むような白魚の手を手に入れたのだ。

頑張ったな私（笑）

やれば出来るじゃんw

恐ろしい現実を拒否するように私は自分をおちやらけて褒め、前に歩く力とトイレを探す冷静さを必死に保たせていた。

じやり、じやり、じやり。

玉砂利を踏みしめ、トイレに向かう。

ヒールがない靴を大またで歩き、顔はやっとの思いで冷静さを保っていた。

トイレは境内の隅にあり、まるで忘れさられたみたい薄暗く人気もなかった。

たった数分だったが、もう何十時間にも感じられた歩みの最後の力を振り絞って…

目を閉じて暗い鏡の前に立つ。

違う、鏡を見たら私の顔だ。

そう心で叫びながら

そっと目を開き鏡をのぞいた。

そこにはまるで私とは違う綺麗な女性がいた。

美しい真っ直ぐな黒髪を纏め、大きな印象的な二重を持ち、完璧な配置を施された瓜実顔の美しい女性が…。

一度見たら暫く目が離せなくなるような美しさだった。

きつと私がこの女性を見たら、あまりの美しさに目を留め、憧れの目で下から上までなめるように見てしまっていただろう。

しかし、この女性は私の思いのままに目を閉じ、口を開き、口角を上げる…。

信じられず、私は思いつくままこの女性がしないだろう口を出した
ひよつとこ顔などの変顔を飽きずに何十回と形作る。
そのうちトイレを使いに来た人が何人も鏡で変顔を作り続ける女性
を気味悪そうに見ていったが、私はそれを気に留める余裕もなく変
顔を作り続けた…。

この鏡の前の女性は全て私の思い通りの顔を作り続けた。

全て、全て。

「あ、あ、あ、あ、あぁ……いや……」

私の中の恐怖が溢れ出し、もう抑えることが出来ない。

私は声にならない恐怖の叫び声を上げた。あげ続けた。

怖い！怖い！怖い！！

ここにいるのは誰？

私は何故此処にいるの？

此処は何処？

私の体は？

私は何処？

いや、嫌、イヤ！！

助けて、誰か！！

お願い、誰でも良いから助けて！！

叫ぶ気力も無くした女性「私はガタガタと震える身体を自分の腕で強く抱きしめ、トイレの床にしゃがみこみ目はうつろで止まることのない涙を流しながら、

「いや、いや。」

とつぶやき続け現実から目を背け震え続けていた。

「もしもし、ちょっと……大丈夫ですか！？大丈夫ですか？？」

どれくらい時間が経ったのだろうか……。

世界が破滅したような長い時間と極限のなかにいた私を誰かが強く両腕を掴み揺さぶってくる。

トイレでの異常を知らされたのか、野次馬か、トイレは忘れ去られた空間を捨て、今では沢山の垣を作し、多くの視線が私を覗きこんでいた。

私を揺さぶる男は白い単に水色の袴を纏い神社の禰宜のようだった。

私は揺さぶる男や周りを取り囲む禰宜の群れ、野次馬の垣をどこか遠くに見ながら、呆けたように暗いトイレの床の一点を見つめ続けていた。

「この人は誰だ？誰か知らないか？」

「誰か、この女性のお連れの方はいらっしやいませんか？」

「おい、あんた。大丈夫か？ここが何処だかわかるか？」

「ねえねえ、あの人どうしたの？」

「やだねえ、なんかに憑かれたのかしら？神社とかでもそういつのつているのね」

「おい、あんま近づくんじゃねえぞ。暴れだすかもしれん。」

禰宜が話しかけ、野次馬が好き勝手噂する様を私はどこか人事のよっに見ていた。

これは私じゃないし。別に…何言われてもいいや。

絶望しかけ自分の世界に入り込もうする私をさらに困惑の縁に落とすように、一人の禰宜が叫んだ。

「あ、この人さつきご家族で安産祈願に来た方ですよ！！え、えつと。そう！！桐生さん！！」

「よし、ご家族がいるんだな。お前顔わかるんだろう。行って探して来い！！」

「はい！！」

年若い禰宜が、私に向かい合う先輩格の禰宜に指示され人垣を掻き分けトイレを飛び出す。

「よかったな、あんた。すぐにご家族がいらっしやるから。」

私は新たな事実地震えを強める。

安産…こども…子供…！

この身体は妊娠して子供を宿している…！

そんな、私は妊娠なんてしていないのに…！

衝撃の事実は私を狂わせはしても、正気にもどる手伝いはしてくれない。

その時、禰宜は私を労わるように、震え呆ける私に自分の熱を移そうかとてもいうかのように掴んでいた両腕を男らしい骨ばった手で撫でる。

その熱は人の温かさを触覚を伝って私に心に移した。

暖かい…。

人事で別世界ように感じ震え続けていた私に、その熱はこれが現実のことと伝えてきた。

その時、何処からか余裕も無く走ってくる足音が聞こえ、人垣と禰宜の群れを超え、彼が姿を現した。

「連れてきました！」

先ほど飛び出していった禰宜は手を膝に置き、荒く肩で息をしながら彼を見る。

「ご苦労だったな。」

禰宜は芳う視線を年若い者に置き、彼と視線を強く合わせた。

「桐生さんですね。この方はあなたのお連れの方ですか？」

禰宜が一目もそらさず問う。

「はい、私の家内の緋佐子です。緋佐子に何があつたんですか？」

「そうですね。私たちもちょっとわかり兼ねるのですが…

トイレで悲鳴をあげている女性がいると言われて駆けつけてみたら彼女が震えていて…。

さつきから何度話しかけても応答が無いんです。

何か心あたりはありませんか？」

「そんな…！緋佐子、緋佐子。どうしたんだ！？」

彼は膝まづき視線を合わせ強い口調で問いかけてくるが、私は答えられない。

「ひとまず場所を変えましょう。ここは人目が多すぎるし、なおかつ寒すぎる。じっくり話しをする為にも事務所に場所を移しましょう。」

呆け、身体に力が入らない私を彼が抱えるように立たせる。

そのまま彼に寄りかかるように使い物にならない足をひきずりながら歩いた。

白い玉砂利や緑の森が先ほど見た時と印象を変えて私に迫る。

ここはお前の世界じゃない。

お前は誰だ…と。

ここは何処…？（後書き）

読んでくださり有難うございました。誤字、訂正などありましたら、すぐに直しますので教えていただければと思います。

精神的にあまり強靱でなく、打たれ弱いので批判はご遠慮くださればありがたいです。

社務所にて…（前書き）

読んでくださって、本当に有難うございます。

パソコンの前で皆様に向けて手を合わせてお礼しています。（泣）

皆様の暇つぶしにでもなればとても嬉しく思います。

社務所にて…

事務所に着き、私を抱えていた彼は私とともにゆっくり腰を下ろし、私の顔を覗き込む。

やっぱり知らない。こんな人見たこともない…。

彼を見ても、私の記憶にある人物のどれとも一致せず、私はこれが私と全く違う人生を歩んでいると思ひ知る。

「緋佐子、わかるか？ 俺だ。用だ。お前何があつたんだ？」

「よ…ひ…？」

彼は一度も染めたことがなさそうな黒髪を長めにながし、涼やかな

目元が印象的などちらかといえば酷薄そうな顔立ちだった。

ただ、自分に強い自信をもつ意思が強そうな端整な顔をしていた。

この人はどうやら知らないながらも私の夫らしい。

私ばかりうじてある理性と思考を集め、ただまだ人事のように考え始める。

私がここでこの身体が私じゃないと叫んでも、誰も真剣に聞いてくれない。悪ければ精神病棟送りだし、主張が通ったとしても、こんな誰も知り合いがないなか一人で生きていくなんて無理だ。

私はこんな心が狂って、絶望のなかでも、至極人間的な打算に考える自分に反吐が出て笑いがこみ上げながらこの彼の話にあわせることにした。

「よ…う…？ 用！！ 私…わたし…ちょっとトイレにいったら…
なんか急に…きゆうに…。」

さも信頼する人間に助けを求めるように彼にしがみつき、要領の得ない話でごまかす。

「ああ。わかった。大丈夫だ。」
彼はさすが私を一瞬躊躇し、固い動作で抱きしめる。

私たちを囲んだ禰宜たちは安堵の表情を浮かべる。

私は自分のとりあえずの安全と安定の為に彼についていこうと決めた。人間は所詮自分が一番可愛く、他人のことなど二の次なのだ。

見知らぬ家族

「良かった。ひさちゃんがなかなか帰ってこないから心配したのよ。具合悪くなってたんなら言ってくれば良かったのに！用さんが見つけてくれて良かったわね。」

「うん。。。」

私は具合の悪いふりをし、私に話しかける女性に返事をする。

具合が悪いと彼に抱えられるようにして事務所を出た私を待ち構えていたのは、駐車場で待つ見たこともない老夫婦だった。

「ひさちゃん！…どうしたの?!」

「大丈夫です。義母さん。どうも具合が悪くなったらしくて…。な
あ、緋佐子?」

「うん。…」

彼は先ほどのことは無かったかのように、具合を悪くしたのを介抱するのを装う。

彼の配慮にこのとき感謝した。もし、この時突っ込まれた質問をさ
れても私は返事も出来なかっただろう…。

私が頼り心の拠り所になる家族は私の見知った家族ではなかったの

だから…。

頭は締め付けられるように痛く、視界はぐるぐると回り焦点が合わ
せられない。

自分の安全のための選択が、間違っていたのではないかと迫り続け
る。

この夫…らしい人と、この両親…らしい人と私はこれからどう、ほ
ろを出さないように付き合えばいいのか？

ぼろが出て、真実が突きつけられたとき、この人たちはどういう反
応をするんだろう…。

この妻…娘の皮を被った別の人間を…。

知らない両親から慈しまれる視線を居心地悪く感じる時間も短く、車は目的地に着いた。

普遍的な住宅街のなかにある、白いどこにでもある一軒家。ここが実家らしい。

「用さん。運転有難う。まずはあがって運転の疲れを取って頂戴。」

母らしきひとは義息子を労わり、女主人として場を仕切り始める。

「有難うございます。」
如才ない顔をした彼は、笑顔を向けた。

父らしき人は無口らしい。彼に軽くうなづき、家に入っていった。

私はこの白い家を凝視するように見つめ、一步も動けずにいた。そんな私を一瞬いぶかしるように見て、2人は家に入っていく。

虎穴に入らずんば虎兇を得ず。私は覚悟を決め、家に入ってしまった。

見たこともない廊下……。部屋……。そのあちこちには私の知らない身体の私が沢山の笑顔を浮かべ、家族と並んで写っていた。

両親、私、妹らしき女性……。家には家族の記憶が溢れていた。そこで初めて私はこの身体の私を思った。

彼女は何処にいったんだろう……？

彼女の皮を被った私……。彼らから見たら、私は彼女の身体を奪った極悪人だ。

責められるのはイヤだ。辛いのは……。嫌だ。真実を知った彼らが私をどうするのは想像もつかず、私は恐怖で小さく震えた。

「ひさちゃん。手伝って。もうこの時間だからご飯にしましょう。」

母らしき人は私に笑顔を向け、幸せそうな顔をして台所からお玉を振り回し呼んだ。

見知らぬ家族（後書き）

何故パソコンより、ケータイからの方が編集がしやすいのだろう…？

書くのに四苦八苦してしまっています。（笑）
誤字脱字などありましたらお知らせください。

初めての夜

大きな試練だった母らしき人の夕飯の手伝いをどうにかこなし、他人の気詰まりな家族の団欒に居つづけ、やっと自分の部屋という場所へ逃げ込んだ。

黙り込み小さく微笑むだけの私を、皆訝しげに見たが具合が悪いのだろうと思ってくれたようだ。

この部屋にいても、全く自分の部屋だという気がせず落ち着かない。

都会的なセンスで纏められたインテリア。クローゼットを開ければブランドに疎い私でも知っているようなハイブランドの服が並び、鏡台には沢山のスキンケア用品や装飾品などが並べられている。

この身体の女性はブランド物を見に着け、いつも身なりに気をつけている、お洒落に無頓着な私とは正反対な女性だったらしい…。

この部屋は借り物のようで、息苦しさしか感じられなかった。

トントン…

「どうぞ」

ドアを開け、物怖じすることなく入ってきたのは夫…。らしきひと、用だった。

35

「なに？」

「いや、お前…。今日様子がおかしかったから。どうしたのかと思って」

彼は私をまっすぐに見つめ、その強い瞳で私の心まで見ようというように質問をした。

「うん…。なんかいきなり調子悪くなったことしか覚えてなくて…。心配かけてごめんね。」

自分を守るためとはいえ、知り合ったばかりの人に嘘をつくことが心苦しく、視線をそらして言葉を出した。

「そうか…。」

視線を床に向け、彼の表情は見れなかったが温度のない返答を返し彼は部屋のベッドの中へもぐった。

「えっ!?!ここで寝るの?」

あまりのことに調子を合わせることも出来ず、彼を振り返って見てしまう。

「何言ってるんだよ。ここに泊まったらいつもここで寝るだろう?お前も調子が悪いんだし早く寝ろ。」

彼は私の言葉を訝しげだが、そのまま眠りに入ろうとしている。

どうしよう…。会ったばかりの人と一緒にベッドで眠るなんて絶対に出来ない…。

でも、別々に眠るっていったら疑問を持たれてごまかせないかもし

れない。まだ何もわからない状況なのにここで疑いを濃くするのは拙い…。

電気を消し私は覚悟を決め、壁際を空けてくれていたベットの空いたスペースへ身体を滑り込ませた。

彼は反対側を向き大きな背中だけが視界に写る。

いつもどうやって寝ているのだろう…。いつもと違う行動を起こし疑問が膨らんでいくのが怖かった。赤ちゃんを授かったんだからきつと仲が良いんだろう。

想像をし、知らない他人の背中に緊張し動悸が止まらないごまかし彼の背中にそっと額をつけた。

額から暖かさを感じる。今日会ったばかりの彼の背中から与えられ

る暖かさや安心感に緊張と疲れから開放されて眠りへと落ちていっ
た。

初めての夜（後書き）

感想いただけたら泣いて喜びます。

ここまで読んでくださり本当に有難うございました。

生きる意味

あれから数ヶ月彼から正体を怪しまれ疑問をぶつけられることはない。

というか、機会がないのだ。

少しずつわかったことだが、彼は大手の一流企業に勤めていて、あの若さで課長という地位らしい。

あの若さというのは目算だが…。

住んでいる家も都心の一等地にあり、所謂高級マンションというヤツだった。

私は、結婚、妊娠の為寿退社…という身の上らしい。家族以外と会う必要がなく、必死にこの女性を生きる場面が減ったことが唯一の救いだったが、そんな状況のため、家においても彼は深夜の帰宅になりほとんど話しが出来ない現状だった。

自分の知っている世界のようで知らない世界が怖く、私は必要最低限の買い物以外家に閉じこもる生活を続けていた。

この家に来て初日、いつのまにか出勤準備をしていた彼を送り出し、見つけたパソコンで私はネットを続けた。

自分の名前、家族の名前、友達の名前、自分の住所、自分の最寄り

駅、自分の知っている事柄……。あらゆるものを検索し続けたが、でた答えはerrorだった。

この世界で私の住んでいた住所はなく、地図には全く違う名前が載り、自分の名前、友達の名前、果ては知っている芸能人の名前まで検索したがひとつもヒットするものはなかった。私の現実はここでは非現実になっていた…。

ガタン！！

あまりのことに椅子から落ち、現実を拒否する。

もう頭がおかしくなりそうだった。喋る言語から違うのか、通貨が違うのか、法律が違うのか、ここは日本なのか、ここは地球なのか… 全てを信じられなく、信じられるものがなにもなく異世界に放りだされたようだった。

ここで初めて、やっと初めて私は自覚した。ここは私にとって異世界なのだ…。

自覚し、どうしようもなく無力感に苛まれた…。

太陽は昇り、窓から見える空は青く、私は呼吸しているのに…ここが私の知っている地球ですらないことがどうしようもなく怖かった。ここに私の知っている確かなものは一つもなかった。

椅子から転げ落ちた体制で仰向けになり、空を見つめ呼吸をし続ける。私に出来ることはこれしかなかった。私がこんなに世界が落ちてきたような衝撃を受け、生きる気力をなくしても太陽はそこに存在し、翳っていった。

「よく台詞にある、あなたが死んでも地球は回る…。なんか違う感じで実感しちゃったな…。」

太陽が陰り、日が落ちて夜が来ても私は動けなかった。もうどうでも良かった。彼に不審に思われて糾弾されても、追い出されても、どうでも良かった。

追い出されたら…どこへいこうかな…。もう生きていく気力が出ないよ…。

そんな感情で染められた時、お腹からどん！と衝撃がきた。
「な、何？」

思わず起き出し、お腹に手を当てる。訝しげにお腹に手を当てているとまた、どん！という衝撃がきた。

「あ！！」

その時、やっと思い出した。この身体は私一人のものではなく、もう一つの命が宿っていることを。

じっと息をつめ、お腹に手を当てていると今度は先ほどより小さめにどん、という衝撃が来た。

赤ちゃんが。自分がここにいることを一生懸命主張していた。小さなちいさな命がここにあることを…。

その時、私の心に宿ったのはこの子を守らなきゃ…という感情であった。

この小さな弱い命は、私が生きるのを止めたら…守るのを止めても死んでしまう。この子には私しかないのだ。

その時、世界にたった一人だった私に小さな味方が出来たような気がした。
この子のために何でもしてやるっ…。そう思った。

生きる意味（後書き）

何があっても、どんなに悲しいことが起きても太陽は昇り沈み夜がきます。

彼女の夜明けはいつ来るのかな…と思いつつ書いています。

初めての二人きりの食事

パタン…。

一日の疲れを顔に表し、漆黒の髪と額に手をやるように彼は帰ってきた。

「おかえりなさい。」

そっと彼を労わるように声をかける。

彼はハツとしたようにこちらを見て、信じられないようなものを見るような目をして訝しげにこちらに声をかけた。

「何をしているんだ？」

「何って…お出迎えに…。何か変…？」

彼の視線がとても冷たく、床を見ながら彼からかばんを受け取った。

「変って…。今まで君は…。」

いや、いい。

それよりどうして

こんなに真っ暗なんだ?」

「うとうとしながら待ってたから。もったいなくて消してたの。だめだった?」

私は何か失敗したかと、心を硬くしながら対応を続けていた。

「いや…。だが妊婦で足元が危ないから付けておきなさい。」

「うん…。ありがとう。」

彼から労わるような言葉を受け、少し力を得たような気がした。

勢いに任せるように言葉を続ける。

「もう、遅いからと思ったんだけど…夕飯食べる?」

「はっ? 夕飯? 君が…?」

彼はさらに凝視するように私を見る。

「うん…。私は食べたんだけど…。ちよつと頑張ろうかな…と思って。赤ちゃんのためもあるし、栄養のあるもの沢山作ったんだ。良ければ食べてくれる?」

私は犯してしまった失敗を必死に隠すため、何とか言い訳を並べ立てる。

私には彼女の記憶が全くない。仕事に疲れた新婚の旦那さんを起きて待つて、夕飯を出すことがこの夫婦では異常であつたらしい。

どうか：騙されて：。祈るような気持ちで彼の視線から逃げ、キッチンで鍋に火をかける。

ネクタイを緩め、くつろぐ姿勢になろうという彼の変わらない視線が痛い。目を閉じ、必死に耐えていると、彼はふっと視線をはずした。

「ああ。ただこうかな。夜中だし、少しだけ出してくれ。」
ダイニングを見ると、先ほどより目元を和らげこちらを見る彼の視線とぶつかった。

「うん。すぐに用意するから待つてね。」

夜中ということ、少しずつおかずを彼の手元に並べた。肉じゃが、インゲンの胡麻和え……。出汁巻き卵、みょうがと冷奴。あれから、赤ちゃんのために自分のすぐ出来る料理を作ったものだった。

彼は一瞬並べられた料理を見、そして勢いをつけるように食べ始めた。

躊躇したのは刹那で、それからもくもくと食べる彼。

夜中の静けさもあいまって、そこには食べる姿だけがある。節ばった、細く綺麗な手が、美しい箸使いでどんどん食べ物を胃に納めていく。

彼は何も言わなかった。感想を言うでもなく、甘やかな目を向けてくるでもなく。でも、私はとてもその姿が美しく、嬉しいと思った。

Yシャツの上からでもわかる鍛えられた肉体。

咀嚼するたびに動くスツと通った顎と首。動くたびに流れるサラサラな漆黒のストレートな髪。

その見目麗しい彼が、残すことなく私の料理を食べている姿に…。

その瞬間私の心は彼で埋まり、胸が痛くなった。

愚かなことに私は、たった一日でこの身体の夫に恋をしてしまった。

決して私自身、私の全てを見てくれない彼に…。

初めての二人きりの食事（後書き）

恋をするのは一瞬で、どんな状況も恋の前では無力です。たぶん…。

決して容姿に惚れたのではなく、雰囲気や少しずつ感じた中身に惚れたっていうことにしておいてください。（笑）

ここまで読んでくださり、本当に有難うございました。

明かされた事実（前書き）

ご気分を悪くさせる表現があります。

気に障る可能性があるので、もしお嫌な方は避けてください。

明かされた事実

あれから私は日々の買い物や通院以外はほとんど外に出ず、好んで閉じこもる生活を送っていた。

変わったことと言えば、リビングや部屋のあちこちに増えていく何冊もの妊娠中の心得のHow to本やネットで取り寄せた妊娠中に良い食材たち。胎教CD、そしてどうしても我慢できずに買った数着のベビー服だった。

彼に恋をした日から、この身体にいる恐怖よりも彼との生活や赤ちゃんと愛おしく感じる日々になっていた。

現金なものだ…。最初は緊張や恐ろしさで生きることすら放棄しようとしていたくせに…。

でも、今まで報われない恋ばかりをし、自分を愛してもらえないことがほとんどなかった私にはこの恋した彼との結婚生活は胸がつまるほど、嬉しいものだったのだ。

彼は相変わらず、深夜に帰り、朝早くから入社する忙しい生活を送り、休日出勤することもままにあったが、それでも帰ってもくもくと私の食事を残さず食べてくれていた。

休みの日には、一緒に出産準備の講座にも出てくれ、胎教をし、散歩に付き合ってくれる。

本当に良い夫で、妊婦友達からは羨ましがれるばかりだった。

ただ、身体を気遣ってくれ、一緒に生活をともにしていても私は未だに彼から抱きしめられたことも、スキンシップもされたことがなかった。

私から彼に近づこうとしても、彼は厭い話題を逸らすように私から身体を避けた。

私は未だに彼の笑顔を見たことがなかった。

毎日テレビや新聞から、住所等以外は自分の常識が通じる世界という確信を持ち、恐る恐るながら今日も買い物に来ていた。

買い物に来ても考えるのは、赤ちゃんのこと、用のこと…。

妊娠中の運動も兼ねて足を伸ばし都心の大型CDショップに寄る。胎教にはモーツァルトが良いって聞くけど、今度は和楽器でも聞いてみようかな…とCDショップの中をうろつろしていた、その時…

「緋佐子、緋佐子じゃねえか!！」

初めて聞く声の主がなれなれしげに肩に手をかけ、自分の方に振り向かせた。

「どうしたんだよ！お前。ケータイに連絡してもシカトしやがって。どんだけ放置してんだよ。」

初めて見る顔が顔を顰めて、私を問い詰める……。どうしよう……。どうやらこの身体の女性のお知り合いらしい……。今まで買い物に出ても大丈夫だったから、気を抜いていた。ケータイを持っていることすら知らなかった。

上手く調子を合わせることも出来ず、人違いを装う……

「すみません……。多分人違いをなさっているかと。ちょっと存じ上げないので……。」

目に力を込め、腕に力をいれなれなれしく抱かれていた肩をはずす。

向かいあつた彼は今時の若者……という格好やスタイルをしてこの体の女性の何の繋がりがあるのか判別出来なかった。

ただ、小奇麗な顔をしており軽そうなモテそうなタイプだなという印象を受けた。

「はっ？俺だよ、俺。静也だよ。あれだけ付き合があつたのにそれはなくない？俺がお前間違うわけないじゃん！」

彼は人違いという私の言葉に納得せず、余計に距離を詰めよつて来た。

「すみません。本当に、知らないんです。人違いです！」

もう周りを気にする余裕もなく、詰め寄る彼から必死に距離をとる。

一瞬間が空き、訝しげに私を見た後、彼は一人納得したように言葉を発した。

「はぐん。そういうことね。確かに、お前着ている服も変わって印象も変わったもんな。金づるの旦那に気に入られようと服もイメチエンして、俺とも距離をおきたいってわけね。ちよっと前まで旦那の帰宅が遅いからって妊娠中でも俺らを呼んで夜遊びしまくってたヤツがよくやるね。女って怖っw」

「えっ…」

目の前の人物が発した言葉が理解できない…。金づる？ 妊娠中に夜遊び…？

「何を…？言ってるの…？」

聞こえた言葉が信じられず言葉が震えをともない口から出る。

「さんざん遊びに付き合ってた静也様に向かってお前もよく言うね。まあ、それでこそ緋佐子だけ。その妊娠したハラだって合コンで見つけた一流企業のエリートに狙いをつけたお前がはめて出来ちゃった結婚仕組んだくせに。」

旦那も否定して墮胎させようとしたけど、お前の策略勝ちで寿退社、優雅な専業主婦だわなあ。

そのくせ、旦那がお前に愛情がなくてほっとかされると、今度は俺たちを呼び出して旦那の金で夜遊び三昧。旦那との交渉がないからってカラオケで俺がお前をさんざん愛撫してイカせてやったのも忘れたのかよ。」

「えっ…。なに…。どういうことなの…?」

目の前の人物から明かされたのは用との信じがたい事実だった…。

明かされた事実（後書き）

最後に気分が悪くなるような表現があり申し訳ございません。ちょっと身体の女性の人間性が見えてきましたね。

お気に入り登録してくださった方、本当に本当に有難うございます。

凄く嬉しいです！！マジで涙目で画面を見ました！
皆様に楽しんでいただけるようこれからも頑張ります！

もう耐えられない……

ドン！！ ガタ！ バタバタバタバタ……

「ハア…ハア…ハアハア…。」

納まらない動悸と荒い呼吸が続く…。

「またなあ。緋佐子〜。また旦那放って遊ぼうぜ〜。俺、お前逃がさねえからなw。」

気を抜けばあの男の去りかけの私に投げかけた会話が耳によみがえる。

最後に笑顔で言葉を掛けた男の顔は笑っていたが、目は笑っておらず、ずっと私を見ているようだった……。

全速力で逃げてきた足が痛い…。でももっと痛いのは心だ。

私はさつき恐ろしい話を聞いた気がする…。認めたくない事実を…。

この身体の女性は…用をハメて妊娠して結婚した。

用を選んだのはエリートで金づるにちょうど良かったから…。

せっかく出来た赤ちゃんなのに、妊娠中にも関わらず夜遊びをし、男と関わりをも持っていた…。

は…？おかしいよ…。ちょっと待って？なにそれ？

「ウソだ！私は信じない！！」

あの男の口から告げられた事実が痛い…。見も心も…痛い。

頭がおかしくなりそうだ……………！！

用に恋したことも、ここ暫くの幸せも全て粉々になって手から零れ落ちていくようだった。

座り込んだ時に投げ出した買い物たちが目に映る。
胎教に良いCD、用が好きだと確信した揚げだし豆腐の材料…、育
児雑誌…。

その全てが嘘だった…。
嘘だったなんて……………。

うつすらとぼやけた目をしながら立ち上がる。

「嘘だ…ウソ…。
信じない、私は信じない…。」

目をキッとさせ、さっきの事実を嘘だと、用さんと育んできた幸せ
を証明するために…、私は前のめりになるように家中を探し始めた。

本棚にあるアルバム、パソコンにあるデータ、DVDなど、私は2人の思い出に関わりがありそうなものを…ありとあらゆるものを調べた。調べ続けた…。

でも…なかった。

旅行先やデートで撮ったかもしれないと思ったアルバムやDVDは一つも見つからず、あったのは結婚式の時の写真だけ…。

思い出の品も探したが、該当しそうなものはなかった…。

「ない…。ないよお…。用…。」

力が入らず、肩を落とす私の最後の希望となっていたのは、目の前

に鎮座するこの身体の女性が使用していたと思われる携帯電話だった。

あの日のバッグに存在を忘れられたように入っていた。

…あの日から数ヶ月ぶりに電源を入れる…。

電源ボタンを押すとぼおっと明るく灯りはじめ…

何処かのブランド系の待ち受け画面が浮かび上がる…。

ピ、ピ、ピ、ピ……

ケータイを操作しても、誰か男の人と写っている写真があるわけもなく、普通のデータだった。

でも…いくら調べてもメールや電話の送受信履歴は消えており、メールのデータも綺麗に一つも残っていないかった。

それが逆に異様で…不信感を強く抱かせた……。

どうしよう……。あの男の言葉だけで信じるのは嫌だ！！
誰か…誰か…聞ける人は……………。

すぎる気持ちで思いだしたのは、あの私にとって偽者の家族で食卓を囲んだときの会話だった。

~~~~~

「これで美樹ちゃんもいたら家族全員揃ったのにね。美樹ちゃん大学のほうが忙しくて、帰って来れないんだって。久しぶりにお母さんの料理食べさせたかったのに残念だね。ひーちゃんはちよくちよく帰ってきてくれたけど、美樹ちゃんは大学へ入って一人暮らししてから全然になっちゃったわね……。」

~~~~~

そっだ……。妹、美樹さん……。

このひとなら……詳しく知ってるし、最悪バレても身内だからなんとかなるかも……………。

疲れた頭で正常な判断力を無くし、危険な賭けを知りながら、妹の美樹という女性に電話をかける…。

強く押したボタンから発信され、よく聞く待ち受けの音が鳴り始める…。

出ない…。焦る気持ちから何回もかけていたが、それでも出なかった。

今日は諦めようか…そう思い始めていたとき
プツッと音が消え 繋がった…。

「……………」
「……………」
「……………」

お互いに何も話さず、無言が続く…。

意を決して、話し始めようとしたとき、電話口から相手の冷めた声が耳に入った。

「何か用？」

「あの……。」

言葉がつまる……。そんな私を意に介さず言葉は続いた。

「ああ、用はあるわよね。」

あんた用がないと、私なんかに掛けてきやしないものね。それで今度は何？

また男と遊ぶからアリバイ作れ？ それともお金を貸せ？ それとも私にまた面倒な男でも押し付ける気？

大学へ入って、あんたから逃げようとしたってあんたは私の都合なんか構わずにアレをしる！これをしる！

もううんざりよ！！！！

せつかくここ暫く連絡がなくて、やっと開放されたと思ったのに！！

私もウソについて、あんたを誠実な人間だと言葉で飾り立てて、信頼させ、罪悪感すら捨て去ってあんたが旦那を捕まえるのに手伝ってやったじゃない。

もう欲しかったものは手に入ったでしょ！ 私は親や心まで捨てたんだ。いい加減私の人生を返して！！」

プツ……。ツーツーツー。

冷めた声は最後に怒声に変わり急激に終わりを告げていた……………。

（今のはなに…？ さっき掛けたのはこの身体の女性の…実の妹…だよね…？

それが…それが……………。）

保たせていた力が抜け、身体から力が抜ける。

美樹との会話は私を真つ暗闇の中に落とすとした。あの男の語った事実と変わらぬ内容…。乱れた生活…。そして実の妹に恨まれている事実……………。

彼女との会話でも、この女性の優しさや用との日々は存在していなかった。

最後の…最後の希望が今日の前でくだけてしまった……………。

男の会話、見つからぬ証拠、実の妹すら利用し、恨まれている事実が私を…追い詰めた。認めたくなかった…。
用に愛されていないことを…。

認めたくなかった…！

でも…、思い返せばおかしく思う点はいくつもあった。

仕事帰りの彼を起きて待っていたときに訝しげに見られたこと。
彼に初めて夕食で手料理を出したときに一瞬躊躇した手…。
一通り揃っているのに一回も使われた形跡がなかった調理道具。
抱きしめてくれないこと…。

弾まない会話…。

避ける身体…。

笑顔を一回も見たことがないこと…。

わかってた…。

私…ずっと…ずっと気づきたくなくて、認めたくなくて…目を逸らしていたんだ…。

どうして認められよう…。

知らない世界、重ならない常識…。知らない家族、宿っていた命。

その全てを受け止めて、夫となった人に恋して、やっとここで生きていけると思ったのに。

生きていこうと思ったのに…。

その全てがウソだったなんて…。

私は縊っていたのだ…。用とこの身体の女性が育んだ愛に…。
この世界で唯一頼れると、信じてけると思った用に…。

勝手に恋して、無意識に愛そうとして愛し、それを免罪符にして縊っていたのだ…。

もう…もう限界だった……………

「どうして…。私が何をしたっていうのよ！ 適当ながらも大学までで、平凡ながらも家族に囲まれて…それなりに幸せに生きてきたのに！！ 家族が大好きだったのに…。大切な友達もいたのに…。その全てを奪われて…。こんなおかしな状況に放り込まれて…。やっとなんて…。」

「なんで…。なんで私なの…！？ もう嫌だ！もう頑張れない！！帰して…。私を元の世界に帰してよお！！帰して！！」

力いっぱい叫ぶ。私をこんな状況にした何かに。天にまで聞こえるように。聞かざるえないような叫びをあげて…。
吼えるように、泣き叫び、叫び続けた……………。
この心の叫びを……………。

もう耐えられない……（後書き）

相変わらず暗くてすみません。

やっとこの身体の女性の本性が暴きだせました。

皆に嫌われてるんですよ…。そしてその女性にいますから、周りからもそう見られていることで余計に追い詰められてしまっんです…。

はやくこの暗い状況から抜け出したい（笑）

感想、ポイント、お気に入りしてくださった皆様本当に有難うございます！毎日見ているニヤニヤ喜んでおります（笑）

読み続けてくださっている皆様が原動力です。

これからも宜しくお願いいたします！

愛している…

永遠に思えた時間も、確かめればほんの数時間でもうすぐ彼が帰ってくる時間を迎えていた。

でももう私には取り繕う気力も、精神力も全て残ってはおらず、ただ壁に身を預けた状態で無為な時間を見つめていた…。

「神も仏もありはしない…。結局私は一人きりだね…。」

誰に言うともなしに私は語っていた…。

キィ…バタン…

暗闇に彷徨う時間が極限を迎えたころ…彼が…用が熱と濃密な気配を湛えて帰ってきた。

「おい、どうしたんだ？寝ているのか？」

暗闇の中、迎えにこない私を不思議がり声をかける。

パチン…

灯りに目がなれ、飛び込んできたのは泥棒にでも荒らされたような見る影もない雑然とした部屋だった。

「つつつつ…。どうしたんだ、これは?! 緋佐子、緋佐子!」

彼の血相を変え私を探し求める声が聞こえる…。
ドン…バタバタバタバタバタ…

「緋佐子！！ どうしたんだ？！ 無事か？！」
壁からずり落ち、冷たい床に横たわる私を見つけた用は、今まで一度も触れなかった腕で初めて私を抱きかかえ顔を覗きこんだ。

彼の外で冷えた冷たくも力強い手と腕が私を抱きしめ、その力強さに促され震えるように目を開ける。
いつもの冷静沈着な顔は姿を隠し、今はその印象的な力強い目が心配と焦燥感をもって私を覗きこんでいた…。

私の視界いっぱい用顔が映る…。

（ああ…なんて綺麗な顔…）
こんな状況なのに私は場違いなことを考える…。

「ふん……。」「

そっと重たい腕を持ち上げる……。宙に浮く腕はゆっくりと用の顔に伸ばされ、頬に近づく……。腕に気がつき、一瞬ビクッと強張る身体。しかし、刹那に表情を変え用は柔らかい表情を見せた。

「よし……………」。

恐る恐る頬に手をやる……。用の表情は変わらず柔らかい。その表情に促されるように彼の頬を包み、撫でる……。

焦って探したからだろうか、そっと浮かぶ汗……。

髪に手をやればそっとシトラスの香りが鼻に抜けた……。

（ああ……この人を、用をこころから、心から愛している……。）

初めて触れた用から伝わる熱は、愛しさを伝え本当にこの人が大切

だと心の底から思った。

「愛してる…。愛してる、用……………」。

ついに我慢できず、千と万の思いを込め彼への思いが私の口からこぼれ出る。

「愛してるの…用…」。

彼は一瞬驚きに目を大きくさせたが、私の顔を胸に抱くように強く抱きしめた…。

初めて抱かれた彼の大きな胸と力強く私を囲う腕に、彼がそこにいる幸せと胸が痛くなるほどの彼への思いをいっぱいにさせた…。

(愛してる、用…。)

ああ…もつとこの愛しさの熱と囲いの中にいたい…。この人が心から愛しい……。でも…だからこそ、私は告げなければならなかった。この身を切るような言葉を…。

「離婚…しよう。用……………」

彼を解放する言葉を……………。

愛している…(後書き)

続けて投稿あります(笑)

私の選択

バツ

困んでいた腕を開放し、驚愕を浮かべながら私と視線を合わす。

「何があつたんだ…？ 俺が嫌になつたのか…？」

用の声は冷静さを保っていたが、瞳には強く動揺が色濃く浮かんでいる…。

本当にこの人は用だろうか？ 今の今まで抱きしめることを避け、この女性を厭い墮胎までさせようとした…用だろうか？

彼の表情と聞いてきた事実が重ならず、胸に困惑が浮かぶ…。やっぱりウソなんじゃないだろうか…？

そう思いたい気持ちでさっきの言葉を撤回したくなってくる。

でも…自分でもこの事実を確信している。彼は確実に緋佐子を厭っている…。

だからこそ、口にした…。離婚という言葉を……………。

声が枯れるほど叫び、天をうらんで叫び続け、力つき身体を横たえた私に唯一残っていたのは用への愛情と二人の子どもへの変わらぬ

愛しさだった。

（この子は私と用が愛して出来た赤ちゃんではない…。この身体の女性との子どもだ…。

そして…私がこの状況な限り用は私自身を見る機会は一生涯訪れず、愛してくれることもないだろう…。）

それでも、私はたった数ヶ月にしかならない時間でも用を愛し、このお腹にいる赤ちゃんも変わらず愛していた。

心の底から……………。

用への愛しさ、子どもへの愛しさばかりが心を巡るなか…、私は自分のことより用への愛しさが募り、彼を幸せにしたいと思った。彼を愛のない結婚から解放したいと思った。

用は墮胎を促すほど、この身体の女性を厭っている。

それはここ数ヶ月の手を伸ばしても避けられる身体から嫌というほど感じていた…。

本当なら赤ちゃんを彼の希望通りに墮胎させ、彼の前から姿を消すのが彼の望みだろう…。

でも、この子を愛している今となってはどうしてもこの子を墮胎する選択肢は存在しない。

この子も心から愛しているから…。

そう考えた時、彼の前から姿を消すのではなく、きちんと話し合い離婚しようと思った。

愛されないまでも、彼から憎まれて生まれる赤ちゃんにはしたくないと思った。

私が全ての憎しみと罪を被るから…この子のことは生あるものとして認めて欲しい…そう思った。

用を開放して幸せにするために…、子どもに愛を与えるために…、私はこの言葉を口にした…。

「離婚しよう…用…。」と…

私の選択（後書き）

続けて投稿になりました。
紛らわしくてすみません。

愛しているから別れよう…。

この行動には賛否両論あるかと思いますが、私は決して間違いと強く否定できません。

愛しているからこそ別れる…というのも愛する相手を思いやった行動の一つだと考えたいです。

ここまで読んでくださり、本当に有難うございました。

向き合った心…

用の視線は依然強く、愛されていると誤解して言葉を撤回したくなる…。
でも、それでは用のためにも、子どものためにもならない…。
用に縋りたくなる気持ちを強く押さえつけ、私は今一度言葉を発した。

「離婚しよう、用。」

彼の表情は強張り、私から告げられた言葉が信じられないような目をして私を見つめる…。

「……………」
「……………」

無言が続き、私の心の奥底まで覗き込む強い視線で私を見つめ続ける。
そして私は秘めた心を隠すように凧いだ表情で彼を見つめた…。

急に目を逸らし、掴んでいた腕に力を入れて私を立たせる。

「な、何？」

「此処じゃ、寒くて身体に悪いから……。」

「うん……。」

彼は力を入らない私を労わるように支え歩き、ソファに座らせ、自分と向かい合わせた。

夜中の静けさのみの空間で無言が続く……。

口火を切ったのは用だった。

「なんで、離婚したいんだ？」

「離婚したいから。」

「さっき、愛しているというのはウソだったのか？」

「……ウソじゃない……。」

「なら何故、離婚したいんだ？」

「……………どうしても離婚したいの。」

「俺のこと…愛しているのか？」

「…愛してる…。」

「子どものこと、愛しているのか？」

「…愛してる…。」

「なら…何故離婚しなければならないんだ？」

「どうしても離婚しなくちゃいけないの…。」

彼からくる質問はまっすぐで、愛しているという気持ちにどうしてもウソをつきたくなくて…答えにならない応えを返し、質問は要領を得ず、どろどろ巡り続ける。

「何故、離婚をしなければならぬ。お前は俺を愛していて、子どもも愛していると言っているのに。離婚する必要はないだろう？」

続けられたどろどろ巡りと、彼のお前は離婚しないだろうという下心を見られたような言葉に耐え切れず、とつとつ叫ぶように言葉を

返してしまった。

「何故？なぜって…用に愛されてないからよ！ 私は愛しているのに…用は私も生まれてくる子どもも愛してないからよ！！」

用は一緒に赤ちゃん講座に行ってくれたり、赤ちゃんの胎教も一緒にしてくれた。支えてくれた。周りからは優しい旦那さんねって言われたわ。でも、全部上辺だけ！！

私が貴方に触れようとしても、避けたじゃない！ もっと会話をしようとしても仕事を理由に逃げたじゃない！

一度も一度も抱きしめてくれたこともない！ 一度も笑顔を見たことがない！！

用が好きよ…。愛してるの…。でも一方通行の愛は悲しいよ…。

これじゃ夫婦でいる意味がない…。一緒にいても寂しいのなら、一緒にいる意味がないよ……………」

用からの質問で叫ぶように出てきたのは、用と離婚し開放したいという気持ち以上に胸に溜まっていた寂しさだった…。

用をこの結婚から開放したい。その決意に微塵もウソはない。冷静

に彼を説得し、離婚し子どもとともに彼の前から姿を消すつもりだった。

でも、彼への愛情とともに積もってきた寂しさも本当だった…。

口から出てしまった言葉にいたたまれず、視線を床から離すことが出来ない…。

彼からの応えはない…。

当たり前だ…。自分の金と容姿に魅せられて寄ってきた女に孕まされて結婚させられたのに、愛情が欲しいと叫ばれるとは滑稽で意味不明に映っているだろう。

ふざけるなど叫ばれてもいいくらいだ…。

（あれ…でも何故離婚に同意しないんだろう…？ きっとこの女性の女性も子どもも憎くて避けられていたはずなのに…。彼の望む状況なのに…。何故？）

このどうどう巡りが続く状況に混乱した頭の中に疑問が浮かぶ。

今までの彼なら即 是と言われて放りだされるところだ…。

静まり返る空間の中、そっと床から視線を外し、伺うように彼を見た。

彼はワイシャツ姿でネクタイを緩めた服装で、身体を背もたれに預け、手で目元を隠すように黙っていた。

静かな…静謐な空間だった…。
この世に私と用…二人しか存在しないようだった…。

彼と二人きりの世界に浸り、見つめる私を現実に戻すように用は言葉を発した…。

「俺は…お前の言う通り、お前も、子どもも愛してなどいなかった。むしろ憎んでさえいた…。
いつも通り、割り切った関係と思ったのに、ハメられて…。慰謝料という謝意になるが誠意を持って、墮ろしてほしいと頼んだ俺をわざわざ笑い、結婚してくれなければ世間に公表して社会的に抹殺してや

ると言われたときは一瞬殺意さえ浮かんだよ…。」

彼の表情は見えないが自分を嘲笑うような笑みを浮かべているのが伝わる…。

彼から紡がれる言葉が痛い……。鋭く棘になり、身を貫き続けるよ
うだ…。

「そうして、結婚しても夜に家を出て、子どもを思うでもなく、男
と夜遊びを続けるお前に失望し、心の底から軽蔑した。そして仕事
に逃げた。

この状況が一生涯続いて、俺はお前に飼い殺されるんだと絶望の中で
覚悟したよ…。」

(痛い…。聞きたくない…。)

そう思い耳をふさぎなくなる気持ちを抑え、彼の言葉を受け止めた
…。

「そんな暗闇の生活が続くと思ったんだ…。

でもある日お前が珍しく家にいて初めて俺に食事を出してくれた時…
その暖かさに驚愕したよ…。毒でも出されるか、はたまた俺を苦し
めるものでも出すのかと思っていたのに…
美味しかった…。

あれから、毎日家にいるようになって朝は朝食を囲み、夜には遅くまで起きて俺の帰りを待つて食事を用意してくれるお前に不思議な気持ちになった…。

向かいあうお前の口元には初めてみる微笑が浮かび、俺はお前を誤解していたんじゃないかとすら思うようになった…。

お前に連れ出されるようにして出かけた赤ちゃん講座では他の妊婦友達に囲まれ談笑していた。お腹の子どものために胎教CDをかけ、一生懸命語りかけるように絵本を読んでいた。夕飯のための散歩を兼ねた買い物では、少しでも家の為に節約する姿や季節の移ろいを目を輝かせるお前に新たな一面を見た気がした…。

ほんの少しずつ俺のなかにお前への優しい気持ちが生まれてきた…。好意のようなものが…生まれたような気がした。」

彼から伝えられる言葉が優しくなり、耳をふさぐ痛い言葉からカタチを変えていた。そう思ってくれていたんだ…。

「じゃあ…なぜ私を避けたの…？ 一度も抱きしめてくれなかったの？」

黙って聞こうと思ってても、我慢できずに用に疑問を投げかける。

「少しずつ育っていく気持ちに理性がついていかなかった。なんせ、出会いと経緯があれだからな…。そんなお前を信じられるわけないじゃないか…。」

また、演技していないとどうして言い切れる。はっきり言って信用できない。

そんな相手と会話できるはずもないし…、笑顔なんてでるわけない…。」

彼の独白はとことん裏切られたこの身体の女性への傷ついた心を表しているようで…とても私からかけられる言葉なんてなかった。

辛い…。私だったら用をこんなに傷つけたりなど絶対しなかった。彼の告白は…だからこそ、お前を愛せないと言われているようで…心が痛かった…。

「……………」
「……………」
「……………」

言葉が…出ない…。

でも、この身体の女性がどれだけ用を傷つけたか、用にどれほど憎まれていくか…思い知った。
用に私に対する優しい気持ちが生え育っても、その気持ちが枷となり…一生…用は…私を愛すことはないだろう…。

私もこの身体の女性が憎い！本当に…！！

でもこの身体にいる以上…私はそれから逃げることはできない。逃げる術もない…。
受け止めるしかないのだ…。

私はさっきと同じ言葉を覚悟を持ってもう一度言った。
「離婚しよう、用…。」

向き合った心…（後書き）

同じところでどうどう巡りしてます…。

もついい加減にしろ！って感じですよね。

もう本当に話が進まなくてすみません（笑）

でも、ここで初めて二人は向き合えた場面になりました。

ちゃんと向き合わせてあげたいです（笑）

ここまで読んでくださり本当に有難うございました。

よければ感想お待ちしております！

張り裂ける胸

夜の静寂に私の言葉のみが響く……。

彼の応えは……ない……。

わかってる……。用に決断させて、責任を背負わせるつもりはない。

私が決めて、私の我侘で離婚し、出て行くのだ。

彼が身重の妻と離縁し、放り出したという事実はあるとはならない。
そんなことは存在しないのだ。

気力もなく、糸が切れたような身体に無理やり力をいれて立ち上がる。

彼は気配に気づいても微動だにしなかった……。

短くも思い出の詰まった部屋で荷物をまとめる。

思い返せばあんな置物にも、あの服にも…全てに用との思い出がある…。

でもこの身重の身体で多くの荷物は持っていけない。

きつとこの身体の女性で買ったものなんて微々たるものだろう。だから、必要最低限、それだけ決めてカバンにつめていった。

母子手帳、必要最低限の生活用品、ケータイ、お金…それだけ…自分の持てる範囲で詰め終わったカバンをもって部屋を出る。

歩きながらお風呂場を見、キッチン、リビングを見る…。

用との私の大事な…幸せがそこに思い出される…。

もう…もう二度とこの部屋で幸せは見れない…。

無性に悲しくなり、胸がつかまって…苦しくなった…。

彼は先ほどと寸分変わらぬ姿勢でそこにいた…。

「用……………」

「……………」

応えはない…。

そっとカバンを置き、こちらを見ず、背を向ける姿勢のように寄り添った…。

（最後の我侭…許して…）

一瞬強張った用の身体だったが、厭い押しつけるでもなく無言で私のそれを許してくれた。

用の身体は生きている温もりと私の大好きな用の香りのシトラスに包まれていた…。

（用…大好き…）

そつと背中に頬を寄せて、用の香りを胸にいつぱいに嗅ぐ…。

（離れたくない…。）

その心を隠し、私は告げる。

「今まで、沢山有難う。本当に、本当にごめんなさい…。用といれて…、用とあちゃんを育てて…本当に幸せだった…。」

（ああ、もうすぐ…。）

「……………」

「離婚届はなるべく早く郵送で送る。申し訳ないんだけど、届出宜しくね。」

親には私から全部伝えるから…用の手は煩わせないようにしておく。私のことはなんとかなるから…もう二度と用に迷惑はかけないから…。」

（ああ、ああ！…終わってしまっ！…！）

泣き出しそんな心を気力で封じ、震える身体を抱きしめる。

「用…愛してる。用の幸せを…心の底から祈ってる。

どうか…幸せになってね…、用…。

さようなら……………」。

言わなければならぬことは…言ってしまった。

もう私にこの場所にいる資格はない…。

許してくれた背中を離れ、震える手で左手の薬指の結婚指輪を抜き取る。

短くも私の一部になっていた指輪は、指から離れるのを嫌がるように抜けない…。

（私が抜きたくないだけかな…。）

そんな感傷を感じながらも少しずつ指輪は抜ける…。

右の手に納まった指輪。左手を見ると、薬指にはそつと指輪のあった名残…日焼けの後を残していた…。

コッソリ…。

テーブルの上に置く指輪。もうこれで私のものではなくなった。

そつとまた用を見る…。

（ああ、見納めだ私の瞳。ああ、もう愛しき人に触ることは出来ない。こんなにも愛しているのに！！）

張り裂けて、血が流れる胸を自分で抱きしめ立ち上がる。

さようなら、私の居場所だったこの部屋。

さようなら、愛しい人。

荷物を持ち、唇をかみ締め最後の言葉を言う…。

「さようなら…、用…。」

そのまま、振り向かず早足で部屋を抜け、外へ出、エレベーターに飛び乗った。

まだ、泣けない。この場所で泣くわけには行かない！！

用を守るため、必死で笑顔を貼り付け、私は向かった。
遠く、遠くへ…。泣ける場所へ…。

緩やかな歩みが早足になり、最後には駆け足になった…。
「はあ、はあ、はあ…。」

やっとたどり着いたのは誰もいない河川敷。
暗闇に包まれたそこには河の流れだけで何者も拒絶し、何者も受け入れていた。

ザッ、ザッザッ…。
誰にも見られないように河川敷を奥へ進み暗闇に潜む…。

もう此処までが限界だった…。

「うっ…、うっ…。うっ…。」

もう…、涙が止まらない…。張り裂けた胸の痛みとともに、私の涙腺を壊し…、全身が悲しみでバラバラになりそうだった。

「用…。よう…。うっ…よう……………」

私を慰める手も、私を抱きしめてくれると期待できる胸もそつと見せてくれるかすかな笑顔も存在しない…。今度こそ、私は愛し、頼るべき人を失ったのだ。

「用、用、用、用、よう！…！あぁ—————」

河の流れる音のみに包まれる。私は本当に一人ぼっちだった。

張り裂ける胸（後書き）

書いていて、自分で胸が痛いです…。

気がついたら、お気に入りしてくださってる方が増えていてびっくりしました！！

本当に、読んでくださる皆様が書く力になっています。読んでくださり、本当に有難うございます。

世間の冷たさ

耳に残るのは河の流れだけ…。
ずっと、このなにもない場所に停滞していたかった。
でも、そうもいかない。

義務は果たさなければ…。

私が泣いた時間だけが過ぎた一日も、もうすぐ日が昇るころという時間になり、それでも役所の受け取り窓口は開いていた。

私のほかにも、届け出をする人たちがいた。

若く、甘やかな空気の二人がそっと視線を交わし、微笑んでいる。

二人で、手を取り合って……。幸せそうな顔をしていた。

本当に幸せそうな笑顔だった。

そんな二人を横目に見ながら一生懸命不備がないように事務的に書類を埋めていく。

（ああ、ここって出生届も死亡届も婚姻届も…そして離婚届も受け取ってくれるんだ。）

なんだか、不思議な場所だ。人生の起承転結を見ている場所。

今の私は……なんだろうか…？

そんなことを考えながらも書類は埋まっていた。
名前、住所…、署名……。私の埋めるべき場所は全て埋まった。

後は、これを用い…。

足を動かし、冷たい空気に戻る。

ぼやけるような日の出のなか、ポストは目立たずに立っていた。

書類を封じた封筒を持ち、ポストの前でたたずむ…。

言葉に出来ない思いが胸をよぎる。

(たった数ヶ月だったけど、幸せだった。)

そっとあげた腕とともに、封筒は落ちていく。もう戻れない。

(これで本当にさようなら…。)

カッン…。

ポストの口が閉まった。

私の果たさなければならぬ義務は終わった。

もう後戻りは出来ない。

この子を守って生きていかなければ…。

そっとお腹に手をやり、新たな日の出を感じながら、街に向かって歩き出した…。

新たな気持ちで意気込み、でていった街は冷たかった…。

離婚した旨だけを伝えたメールを両親に送った後、私はバイト探しにやっきになった。

なんとか暮らしていけるだけ…と探し、バイト募集や無料求人情報誌で電話をかけても、最初はこの容姿のおかげで乗り気になつてくれる採用の人も、妊娠中だと話すと顔を顰め、手のひらを返したように冷たく追い払われた。

最初は子どものためと条件をつけていた募集も、一日、一日と時間を重ねていくたびに我慢をし、最後には最低限でお願いしても、やはり断られどこにも行き場所を失っていた。

やりきれなさがつのって、涙が出てきそうだった…。
しかし、頼れる人もいなく、この子を守るのは私だけ！その強い思
いだけが私を支えてつき動かしていた。

何日も過ぎて…例えビジネスホテルとはいえ潤沢に泊まれるほどの
資金もなく、冷たく吹きすさぶ街へ出て、どうにか住み込みで働け
そうな場所を探す。

足を必死に前に出し、張り紙を見つけては何度頭を下げてくださいし
ても帰ってくるのは否の返事ばかり。
もう踏み出す力さえ失いそうだった…。

「あつ…。」

不意にめまいを起こし、道の片隅でうずくまる。

一人きりの孤独、仕事探しの疲れ、そしてこれからへの不安。

それらが積み重なり、もう身体も心も限界に近づいていた…。

壁に手をつけ、抱えうずくまるようにして、冷たい空気から世間からも自分を守る。

足音を立て、ちらちらとうずくまるような私を伺うような目で見ながらも、皆我関せずで何人も通りすぎていった。

もう通りすぎる人の数も数えるのを止めるほどの時間がたった時…、大きな力強い足音をたてて颯爽と歩く足音がした。

ああ、きつとこの人も見てみぬふりで通り過ぎるんだろう…と考えていた私の前に立ち止まり、驚いたことにその人は足を止め声をかけてきた。

「おい、あんた。大丈夫か？」
ふいに掛かった心配する声に覚えのあるような暖かさを感じる。
反応を返さない私に心配がましたのかその人は腕を掴み、ぐったり
とする私を介抱するように顔を覗きこんできた…。

「あ、あんたは。あの時の…!!」
私を知っているような口ぶりに興味と恐怖を感じ、道路に向けてい
た視線をあげ、顔を見た。
視線が交わる…。

(どこかで見たような……。)
ふいに浮かぶ顔と比べてもなかなか思いあたる人物に合致しない。
そんな私に答えを与えるように

「あんた。あの時の桐生さんだろ。桐生緋佐子さん!!覚えてない
か？俺はあの時神社で介抱をした禰宜の松本だ。」

あの時……？

神社…。

介抱……？

与えられるヒントと顔をじっと見てみると不意にあの始まりの神社での出来事が蘇ってくる。

自分の身体ではない、この身体の女性の中にいる恐怖で発狂寸前だった私を現実の世界へ戻してくれたのは、骨ばった男らしい手で撫で、労わってくれたこの神社の禰宜だった。

「あの時の……。」

覗き込んでいた顔をしっかりと見、あの時と変わらぬ暖かさの人柄を感じる。

「あんた。どうしたんだ？何故こんなところに……？具合が悪いのなら送っていくよ。」

彼は私を安心させるように笑い、そつとあの時のように骨ばった男らしい手で私を立ち上がらせる。

「確か、心配してくれる良い旦那がいたじゃないか。家に帰れば大丈夫だろう？」

あれからの私の事情を知らず、気遣ってくれる言葉が痛い……。

私はあの家には帰れない。どこにも帰る場所がない……………。
「でも、どうしたんだ、その荷物？ どこか旅行でもいくのか？ それなら目的地まで…」「松本さん！！」「」

彼の言葉を遮り、知ったばかりの彼の名前を被せるように呼ぶ。

「あの…松本さん。」

「どうしたんだ？」

どことなく様子がおかしい私に気がついたのか彼はいぶかしげるような感じになる。

「あの…、私、ちょっと事情があって帰れなくて…。あ！でもちやんと泊まる場所は確保しているので。」

今はちよつと立ちくらみがして、座り込んでしまっただけなんです。もう大丈夫ですから。

あの、介抱してくださり本当に有難うございました。」

彼の言葉を挟む間を与えずに饒舌に喋り、ウソでもにっこりと笑い、彼に謝意の頭を下げて、カバンをもち歩き出そうとする…。

コシッ、コシッ……………

何歩目かの歩みの終わりに彼はハッと我に返ったように、慌てて去りかけた私の腕を掴んできた。

「おい、待てよ。わかったから、送らせるだけ、送らせてくれ。心配なんだ。」

彼は心情を顔にうつし、なんとか送らせてほしいと掴んだ腕の力を緩めない…。

そんな久しぶりに与えられる暖かさが嬉しくて、でも頼るのが怖くて…。

つい、足を止めた私だったが、もう身体の限界は超えていたようで、スツと世界が白く埋まり始め、意識が遠のいていった…。

「おい、おい…!!!!」

焦り、倒れ掛かる私を抱きこむ暖かさを感じながら…、私の世界は白くなっていった…。

世間の冷たさ（後書き）

久しぶりの投稿となつてしまい、お待たせしてしまい本当にすみませんでした。

見事に何年ぶりの風邪になってしまい…、人間の熱に対しての弱さを実感しておりました。

さて、忘れてた人が大半かと思うあの禰宜さんがここで登場です（笑）

これからどう関わってくるんでようね（笑）

まだちょっと更新遅れるかと思いますが、お許しください。

読んでくださり本当に有難うございます。

松本さん

なにかの気配を感じ、ふつと意識が浮上する。
目に入ったのは、見たことがない天井だった。
程よく年季が入った天井が写る。

「お、起きたのか？」

声に笑顔をにじませて、いきなり顔がアップになり視界が埋め尽くされる。

「あ…、あの…。」

とっさに返事が出来ず、誰かもわからない人に警戒心がわく。

「ああ、すまない。勝手に家に連れてきてしまった。

あの時、意識を失ってどうしたらいいかわからなくて。

とりあえず、連れてきてしまったんだ。もし、具合が悪いなら今からでも病院に連れて行くがどうだ？」

笑顔が心配顔に変わり、顔を曇らせる。

その顔にやっと前後の記憶が蘇り、自分が道で介抱されたこと。心身の限界で倒れ、意識を失ったこと。

この男が松本という禰宜だということが思い出せた。

「もう、大丈夫です！ほら、元気w」

彼の心配顔が申し訳なく、憂いを払えるように元気よく応えをする。彼はそんな私をみると一瞬顔を曇らせたが、笑顔を向けてくれた。

「そうか。良かった。」

ようやくと落ち着いて、周りをみる余裕が生まれる。

年季が入っているが、落ち着いて安心感と懐かしさを感じさせるような雰囲気。

目を転じれば縁側とこじんまりとした庭が見える。

部屋は雑然としているが、汚いわけではなく生活力のある印象を受けた。

「あの…、ここは？」

「ああ、ここは俺の家だ。親の代から長く住んでいて、いろいろガタがきていて恥ずかしいんだが。」

「そんな…。」

「悪いな。女性をこんな家に連れてきてしまつて。家も汚いんだが、あそこから近くて、ついな。あ、心配しないでくれ。一人暮らしじやく、一応母親もいるから。」

彼は、厄介をかけた私に負担をかけまいとするように、自分が悪いと恐縮する言葉を並べる。

(悪いのは私なのに…。)
彼に悪く、言葉につまる。

そんな私を遮るように

「腹は減つてないか？何がいいかわからなくてとりあえず雑炊を用意したんだが。」

彼の行為は嬉しいが、これ以上迷惑はかけられない。

「そんな…。もう大丈夫です。お母様にもご迷惑ですし。ここで失礼しますね。」

彼の言葉を切るように、布団をはぎ立ち上がろうとする。

しかし、思った以上に疲労が蓄積していたのか立ちがあらうとした瞬間にめまいを起こし、

「あつ…。」

また布団に沈み込んでしまう。

めまいを起こした自分を労わるように

「ほら、まだ本調子じゃないんだ。俺は構わないからここで休んでくれ。そんなあんたを帰したんじゃ後味が悪いし、心配だ。」

彼の真摯な瞳は本当に心配を表し、これ以上断るのは我俣のように感じ、提案を受け取ることにする。

「すみません。ご迷惑おかけしますが、もう暫く休ませていただきますね。」

「おう。気にすんな。」

彼は二カつと笑い、安心させるような笑みを浮べる。

「そうだ、目を回したのは腹が減り過ぎてたからかもしれないな。用意していた雑炊今もって来るな。」

そう言うとは彼は足音をドタドタと上げながらどこかへ消えていった。

「ふふつ。有難うございます。」

久しぶりの人の笑顔と熱は本当に暖かった。本当に久方ぶりに空腹を感じ、どんなに自分が切羽つまっていたか、その状況に追い詰められていたかを感じられた。

（ほんのちよつと……。身体を休めるだけだから……。）
自分に言い訳をし、その優しさに身を委ねることにした。

卯雜炊と郷愁

疲労困憊だった私は、おかゆを持ってきてくれると言った松本さんを待つことが出来ずに起きたらどっぴり日が暮れた時間まで寝てしまっていた。

青くなり、慌ててお暇しようと思した松本さんはお母様と夕飯の真っ最中だった。

慌てて扉を開けた私にびっくりしたように目を丸くする二人に謝意をお暇を言おうとしたところ

「あら、やっぱり起きているほうが美人ねw」といってお母様の言葉がまず飛び込んできた。

びつくりして顔をあげた私に優しい笑顔を向けてきたお母様は
「あら、ごめんなさい。私口から思っていることがすぐに出ちゃうのよ。お世辞じゃなくて本心よ。」
と笑いを含んだ声で言った。

どんな返答をしたらいいか、思わず松本さんを伺うと松本さんは苦笑を浮かす。

「すまん。こういう母なんだ。悪気はないから許してくれないか。」

「いえ、そんな…。」

自分だが、自分でないことを褒められたため歯切れのない応えしかできなく私も苦笑を浮かべる。

「あ、そういえばあなた。ご飯を食べていなかったんじゃないかかしら。今、一緒に食べましょうよ。」

ほら、隆。用意してきなさいな。」

「あ…。私ここで…。」

「あら、せっかく作ったのに食べないの？隆の料理はなかなかのものよ。あなたの分で食べなきゃ捨てちゃうのだから良かったら、食べていきなさい。」

お暇を口にした私を遮り、負担にならないようにご飯を勧めてくれる。

台所から鍋を手にした松本さんも

「そういうことだ。是非とも食べていってけると嬉しいな。」
とそっと私の前に鍋を置き、蓋を開けた。

パカッと開けた鍋の中は、卵と鶏肉と葱というシンプルな雑炊だったが、その色が私にはとても綺麗で優しく写った。まるで…家族の暖かさの象徴のように見えた。

私の本当の家族も体調を崩すと同じような雑炊を作ってくれた。

なんだか無性に家族が恋しくなり、たまらない郷愁に包まれた。

おかゆを見つめる私の瞳に無意識に涙が溜まって、卵の雑炊がゆらゆら揺れる。

そんな私を見守るようにお母様と松本さんは優しい笑みを浮べている。

空腹とその暖かさが喉から手が出るほど欲しくて、じりじりとしりより木の匙で一口食べる。

口に入れた途端、ふわっと優しく暖かい味が広がり、久しぶりに家庭の温かさの味を感じた。

「うっ……うっ……。」
溜まった涙の堰が決壊し、涙をぼろぼろ流しながらまた一口、また一口と食べるすめる。

いきなり涙をながし、卵雑炊を食べる私はそうとう奇異に見えるはずなのに、彼らはそんな私を変わず優しくみてくれていた。

「大丈夫よ。ゆっくり食べて。泣きながら食べちゃ喉に詰まっちゃ
うわよ。」

「ああ。」

そんな語りかける声すら郷愁を誘い、ますます止まらない涙と胸がいつぱいになりながら夢中で食べた。

（お母さん……。お父さん……。誠……。）

残してきた、会えない家族が食べながら順々に浮かび、寂しさと切なさ、悲しさと苦しみと、今与えられている暖かさの色んなもので胸をいっぱいにしながら食べ続けた。

本当に暖かく……。美味しかった……。

勢いよく食べ、あっという間に鍋をからにした私だったが、泣きながら食べたせいか、お腹の満足感と安心感と疲れで食べ終えた途端に船をこぎ始めていた。

（ああ…帰らなきゃ。これ以上ご迷惑は…。）

その意識を最後に眠りに取り付かれていった…。
久しぶりに感じる…、本当に安らかな眠りだった…。

ひさこちゃん、ちょっと手伝ってくれる？」

「はい。今行きます。」

夕暮れに近づくなか、行っていた洗濯物の取り込みを中断し、呼ばれた方向へ慌てて足を向ける。

「はい、洋子さん。どうされました？」

「ちょっとこれをね……。」

「あ、それはですね……。」

すっかり馴染んでしまった松本家……。私はお暇しなければ……と思っていたにも関わらず見事に居ついてしまった。

あれから……

すっかり熟睡して起きた朝にはもう隆さんはお仕事に行かれていて、お母様のなかでは世話をすることが決まっていたらしく、否の返事も言えずに松本家に「厄介になることになってしまった。

本当に申し訳なく、ご厄介にはなれないと固辞をしたのだが、お母様にお腹に手を当てられ

「あなたの為じゃない、私はこの子の為に言っているの。あなた、ここ最近ちゃんと眠ってなかったんじゃない？」

そんな状況がこの子に良いと思ってるの？あなたが身体を壊すのは貴方の自業自得だけど、あなたの身体はあなた一人の身体じゃないの。あなたはお母さんなんだから、この子のことを一番に考えて行動しないと。

今の貴方は母親失格よ。」

その言葉にぐうの音も出ず、ひたすら反省しかなかった。

この子との生活を構築するのに必死で、ちゃんと食べることさえ忘れていた…。

「いい？これはお節介なんだから、遠慮せずを受け取っておきなさい。ちよつといけない言い方もしれないけど、神社にご参拝に来た時点で、住所と身元ははっきりしているから、こつちも安心できるしね。」

あなたの為じゃなく、この子の為に…よ。」

そういつとお母様はお腹を撫でながら微笑んでくれた。負担にならないように、でもちゃんと母親として失格なことを叱ってくれて…。

その暖かさに胸が熱くなった…。

お世話になるのは本当に心苦しかったけど、この子の為の決断と思っ

「お世話になります…。」

と、下を向き、涙がこぼれそうな瞳と震える声を隠しながら頭を下げた。

幸い近所に馴染みの産婦人科を紹介してもらい、この子の健康に問題がないとお墨付きをいただいてからは、お母様は遠慮なくこき使

ってくれた。

お母様という呼び方がいつのまにか洋子さんになり…。

私ができることは家事くらいしかなかったが、ここにいて心苦しく思わないように家事を任せられ、そして沢山のことを教えてくれた。

あかちゃんの靴下の編み方や、育児の方法…。この世界の母には喋りかけて中身が違うことが怖くて教われなかったことを、みんな洋子さんが教えてくれた。

遠慮なく私を使い、褒めて、叱ってくれる洋子さんは、つい本当の母を思い出してしまい、この世界にきてから初めて心がほぐれた生活がおくれていた。

用との生活は好きで、私は幸せだったけど、常に辛く、心が縮こまった生活だったから…。

必死にお腹を蹴り、ここにいるよと主張してくるこの子の成長に幸

せを感じ、松本家での生活は安心に包まれていたけれど、私の心には常に用がいて、洗濯物を干しているときも、編み物をしているときも、夜眠りにつく瞬間も用を思い、用のことを考えていた。

ここに来て、14日。用との家を出てから…20日経っていた…。

20日(後書き)

すみません。自分で書いておきながら欄宜がどういう仕事習慣かちよつとわからなくて…、ご都合主義で書いています。

ご不快にさせてしまっていたら、すみません。

短いので、続けて投稿します。

恋しい

木々の移ろいもはや遠くに消え、夜の時間が長くなり家を出て一ヶ月経とうとしたころ、私は冬の日差しの中自分の荷物の整理をしていた。

詰め込んで見ないふりで生活をしていたが、取り出してみるとそこには繋がるのが怖くて、電源を落としたままの携帯電話とどうしてもと思い持つてきてしまった用の指輪があった

。引き出しの奥に乱雑にしまわれ、存在を忘れられたかのようにあった指輪。

私の指には大きく、同じデザインのものを私の分が婚約指輪として収めてあるのを知っていた。

(きつと、この指輪の存在なんて忘れてるだろう…。)

これだけ…、これだけ、貰っていてもいいよね？)

私はあの日、必死で用への恋しさと用の温もりをカタチにするものにすぎりこの指輪を持ってきていた。

日差しにかざすように用の指輪から世界を見る。

「指輪は二人の世界に繋がっている…。そんなイギリス文学の言葉があっただけど…、この指輪から用との二人の世界は繋がれないね…。」

私のつぶやきは空気の中に消える…。

私から出て行ったのに…、もう一ヶ月も経つのに…、日ごと私の用への思いは強さを増し、薄れることは一向になかった…。

指輪から見える世界は私の今の日常を写し、用の世界とは繋がれない……。

「用……、よう……。」
消えるような声でしか用を呼ぶことが許されない気がした……。涙が一筋、一筋と流れる。

「用……、貴方を今でも愛してるよ……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3865y/>

私のなすべきこと

2011年12月10日01時51分発行